

大黒屋光太夫将来図3図の文化史的研究-その伝存、原図、影響と価値について-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2009-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 憲幸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4178

大黒屋光太夫将来図3図の文化史的研究
—その伝存, 原図, 影響と価値について—

岩 井 憲 幸

— Abstract —

On Three Maps Brought from Russia to Japan with Daikokuya Kodayū

IWAI Noriyuki

Daikouya Kodayū was a merchant of Ise who became lost at sea on February, 1782, and drifted all the way to Russia, where he stayed for ten years. In 1792 A. Laksman, a Russian envoy, came to East Yezo, bringing with him Kodayū and others, and demanded that the Japanese government give up its isolationism and begin trading with Russia.

At that time, either Laksman or Kodayū brought a number of maps from Russia to Japan, three of which I am greatly interested in because their precise nature is not clear.

The originals of the three maps have been lost, but copies of them have come down to us under the titles *Roshiyazu* (M1), *Aziya-amerika-taizizu* (M2) and *Roshiyakoku-tozyōzu* (M3). M1 includes Siberia, the Japanese Archipelago, China, the Korean peninsula, and India. Straight red lines are drawn from Kamchatka in Siberia to Moscow and St. Petersburg. M2 shows Siberia and North America facing each other across the North Atlantic. M3 is a plan of St. Petersburg, with an index on either side explaining what places are indicated by symbols contained within the plan. M2 and M3 are contained in a supplement to *Hokusa-bunryaku*, a full report on Kodayū's drift at sea and his stay in Russia, compiled by a shogunate court physician, Katsuragawa Hoshū, in 1794.

With respect to M1 and M2, I am concerned here with the nature of the original of each maps, and with just how M1 was made. According to Dr. Funakoshi Akio, the original of M2 is a map entitled: *Karta predstavljajushchaja izobretenija rossijskimi moreplavateljami na severnoj chasti Ameriki s okolo lezhashchimi mestami v raznyja puteshestvija uchinennyja, Imper. Akademii Nauk, St. Petersburg, [1774?]*. As this title indicates, it shows routes of Russian voyagers to North America and the places they discovered, but in Japan it was simply seen as a map illustrating the northern territories of Japan and Russia.

A study of materials in the Japan National Archives, the Tenri Central Library, the Hokkaidō Archives, the Hokkaidō University Library, the Shizuoka Central Library, etc. suggests to me the following :

- 1) The original for M1 appears to have been a map of East Asia made in Russia, in which Siberia was drawn in the lower part and India in the upper part, quite opposite of the M1 copy.

When Laksman's party passed the winter at Nemuro in 1792, a man in the employ of the merchant Murayama got a copy of a simplified map showing roads from Siberia to Moscow used by furriers and fur hunters, in which the roads were drawn as straight red lines. It appears to me that in about 1792 in Yezo a shogunal officers copied a Russian map of East Asia and then, in the Siberia portion, he traced the straight red lines on that other road map.

2)M3's original seems to have been a plan of 18 century St. Petersburg.

A copy originally kept in Hazama-bunko, a geographer's library in Osaka in the Yedo era, suggests that it was a city plan entitled "Nouveau plan orienté de la ville, de la forêt et des fauxbourgs de St. Petersbourg. [ca 1780.]"

M1 and M2 gave geographical informations that was new to the Japanese, and afterwards they regarded them as maps of the Northern Territories, mistaking the red lines in M1 for Kodayū's route across Siberia. M3 was made good use of in explaining many places visited by Kodayū, and it was among the Western city plans, such as those of Paris and Utrecht, contained in *Taiseizusetsu*, 1789.

The three Maps appear to have been by Japanese in ways different from their original purposes.

〈個人研究第2種〉

大黒屋光太夫将来図3図の文化史的研究

—その伝存，原図，影響と価値について—

岩井 憲 幸

はじめに

ここでいう大黒屋光太夫将来図3図とは、①「魯齊亜圖」、②「亞細亞墨利加對峙圖」、③「魯齊亞國都城圖」という名で伝存する地図である。(厳密には将来図とはこれらの原図を指すが、ここではゆるやかに言っておく)。これら3図はやや異なりをみせながら各地に伝えられ、②③は『北槎聞略』附図中に含まれ、周知の地図である。本稿は、これら光太夫（さらにはラクスマン）によってもたらされた^{註1}地図類のうち、いまだに性格が不明瞭である上記3図につき、その成立と原図の問題、伝存、影響について調査・研究を行ない、文化史的な一定の評価に至らんとするものである。

それぞれの図には固有の問題があるから、それぞれのトピックを重心にすえて各図を論じてゆきたい。以下、伝わる写図の少ない順すなわち③②①の順で論ずる。③は従来論じられることが少なかったゆえ、やや詳しく述べることにしたい。

1 「魯齊亞國都城圖」

本図は『北槎聞略』附図のひとつであることは上述した。国立公文書館内閣文庫に蔵される（重要文化財。この図をPとする。）内容はサンクト・ペテルブルクの平面図である。『北槎聞略』の附図とはいえ、浄書本とみられる写本にのみ添えられており、他の写本にはこの図が欠けている。伝存は他にひとつ。すなわち静岡県立中央図書館蔵文庫所蔵図である（後述。P1とする）。

Pに関し最大の問題は原図が何かということである。亀井高孝は早くからこの図に関心を持ち、特に原図の探求を試みたが果さなかった^{註2}。原図の問題に至る前に、Pの書誌について述べておかななくてはならない^{註3}。

1) P図の書誌

函架番号185-579の『北槎聞略』附図の一。手描き図。畳み物1舗。大きさは料紙において縦53.2×

大黒屋光太夫将来図3図の文化史的研究—その伝存、原図、影響と価値について—

横74cm前後。他の附図とほぼ同じ大きさである。料紙は薄様の和紙を用い、裏打ち紙あり。図は子持ち枠内に写され、彩色されている。図の左右に略号の説明欄をもつ。彩色は白地に、黒の描線の上に、緑・黄・赤・桃色・水色をいずれも淡くほどこしたもので、上品な仕上がり。むろん白ぬきの部分もある。(色分けの意味は後述する)。森林部分の緑色には樹木をかたどった印判を連続して捺して、これを示す。図郭内右下の空欄は白地のままだが、ここに右から「淺草文庫」「内閣文庫」「日本政府圖書」の蔵書印(いずれも朱印)が捺されている。やや虫損があるものの、保存は良好である。P1は8枚折りにして畳まれているが、図の裏には保護表紙表・裏を有し、次のような題箋をもつ。原文細字は右寄せ。(原文縦書き。引用に際し体裁を変更する。以下同じ。)

北槎聞略圖 魯齊亞國都城圖

2) P図の内容

P図はいわゆる訳図である。原図の問題は後に考えるが、P図は平面図の写しに、色をほどこし、その要所要所に時には片仮名と漢字によって地名を示し、時には文字による記号によって地名等を示すという方式をとっている。地図中の他の記号としては、コンパスローズと、川の流れを示す矢印、さらに森林を示す樹形印がある。森は緑、海・河川・湖沼は水色に塗られる。街路・道路は白地、おそらく空地も白地、市街地は赤・桃色・黄および白地のままと採色される。この配色の意味は、凡例が欠けているために、P図自体からはわからない。(後述)。

図内の文字による記号には、図の左右に設けられた説明欄中に具体的に地名等が与えられている。これらは従来活字化されたことがなかったので、以下繁を厭わず引用しておく。いうまでもなくP図の内容に密接にかかわるからである。

左・右両欄ともに無界6行、6段。文字の記号を大きく掲げた下に、小字で地名等を示す。文字の記号は片仮名によるイロハ、漢数字、十干の3種。まず右欄はイからアまでである。総数36項目。以下、引用にあたり、記号の後の小字説明文も、小字説明文中のさらなる双行細字も同じ大きさとし、後者は丸かっこにつつんで示すことにする。「」は虫損による欠字の補い。合字はそのまま。

- イ アレキサデル子ウスコイ之寺」又ゼンスコイマナシデラ_ト云尼姑ノ寺也
- ロ ムシンノイマナシデラ 女人禁制之寺
- ハ キニヤジホチョンキンタウレイチスコイ」弟宅^{註4}
- ニ ヲシリピタリ 病院也(ソ一ダテ以下ノ小」吏ノ養生処ナリ)
- ホ ソ一ダテ^{註5}ノ居処 人馬共ニ四千許
- ヘ 國王花御遊ノ時輿馬ヲ容ル、処」(第1段)
- ト 國王ノ花園
- チ 此亭方七間斗ニテ二階造_リ也柱戸」障子瓦其他人物鳥獸艸花ノ類皆具」ヲヨセテ造リタリ
- リ 國王花園遊覽ノ伴饌ヲ奉ル処
- ヌ 金銀錢座
- ル ガラフムーシンブーシキン弟宅

- ヲ キニヤジユスポーフ第宅」(第2段)
- ワ アビチェカリ 薬局也」主役イ[ワ]ンイワノウイチツァム
- カ アラスモフスコイトモ
- ヨ ガラフシユハロフ第宅
- タ カタリツコイスウエルコ」諸國流寓ノ者ノ寺
- レ 女帝ノ輿馬ヲ置処」又冬中花木ヲ養フ温室ナリ
- ソ ガラフキニヤジポチョンキン第宅」(第3段)
- ツ ソーボル 國王ノ寺ナリ
- 子 幼院 (捨子ヲアツカリ養育スル」役所ナリ)
- ナ 薬局 (主役」ウヱリモザハルウイチギレウエ)
- ラ モスガラート 諸人夜遊ノ処
- ム 本國商人ノ店
- ウ ガラフトルチレニノーフ第宅」(第4段)
- キ ガラフチジンガウゼン第宅
- ノ ドーレッツ 王城也
- オ 遊山処
- ク ムラミミ石ニテ造リタル城 空城ナリ
- ヤ 遊女屋
- マ 船藏 花木ヲ養フ温室」(第5段)
- ケ スツルゴヲシコーフ第宅
- フ ガラフウヲロンツョフ第宅
- コ ヲルデト云佩モノヲ與ル処
- エ バンカ 銀庫也 諸官ノ俸銀此処ニテ渡ス
- テ 學校 (商人農人ノ学問処ナリ」教師 イワンコーフ)
- ア ベイトロベルライ之銅像」(第6段)

左欄は次の通りである。総数36項。

- サ ムラミミスウエルコ 石ノ寺ナリ
- キ カマリヘールナリシキン第宅」國王ノ統絶レハ此家ヨリ位ヲ継
- ユ 本國商人ノ店
- メ セナテブリカジノドモ」政ヲ議スル役所ナリ
- ミ ガラフアンガリタ第宅
- シ 商人農人ノ学校 (スツルゴシコーフ通ヒテ」教育スル)」(第1段)
- エ ガラフベスホロツコ第宅
- ヒ 商人デミドフ宅

大黒屋光太夫将来図3図の文化史的研究—その伝存、原図、影響と価値について—

- モ ガラファイガリスツロム弟宅
- セ []ノイキャツタラ 戯場也^{注5}
- ス 麦粉ノ店
- 一 ガラフソイマノーフ弟宅」(第2段)
- 二 鳥獸魚類ノ店
- 三 獸ヲ屠殺スル処 屠殺ノ價銅錢十二箇
- 四 ペイトロベルライノ看樓
- 五 焰硝制法処
- 六 ツワルスコエセロノ街道」又 シビリノ街道
- 七 諸國商人ノ店」(第3段)
- 八 諸國商人住宅_并遊女屋
- 九 官人ノ学校
- 十 宝蔵
- 十一 ソーダテ仕置場
- 十二 國王ノ船藏_并船ヲ作処
- 十三 廟所」(第4段)
- 十四 ヘイトロ自分船道具其外ノカリヤ
- 十五 國王ノ砂糖製処
- 十六 新学校 商人農人ヲ教育スル処
- 十七 ウェリコイキニアジパーウラドウレッツ 太子ノ城
- 十八 ワシレイスコイヲストロハ
- 十九 カメンノイヲストロハ」(第5段)
- 甲 ヘルヲイリ子イ 第一街
- 乙 フトロイリ子イ 第二街
- 丙 チャテイラリ子イ 第三街
- 丁 テリイチリ子イ 第四街
- 戊 ビヤトイ、リ子イ 第五街
- 己 セストイ、リ子イ 第六街」(第6段)

このように見てくると、主に、イ〜スと一〜四の記号はP図で大ネヴァ河を境としてその下方に付され、十千は大ネヴァ河の上方に付されること、かつ又図の右から左へと付されていることがわかる。さらに十千の甲〜己は街路名である。なお、P図で明確に描かれている橋は四つである。以上の記号は、地名よりも国王や公の施設、貴顕の邸宅などを主に示している。よって大黒屋光太夫が『北槎聞略』中に述べたペテルブルクでの見聞を示す際の参照図、あるいは逆に見聞の場所を記録する図としての役割が大きかった図であったろうことを容易に想像できる。

3) 配色の問題

さて彩色されたP図のうち、市街地にほどこされた赤・桃色・黄の3色は何を表示するのであろうか。P図図郭内右下の空白の枠の中には、本来凡例等が記されてあった場所にちがいないのだが、上述のごとくP図では空白であり、ここに蔵書印が捺されているにすぎない。『北槎聞略』の他の附図でも同様であるが、故意に原図を髣髴とさせる情報は写しとられないのである。したがってP図以外の資料の出現をまたなければならない。(むろんP1でも該所は空白)。

その資料として、筆者は間五郎兵衛旧蔵「魯西亜新都ペテルブルグ之圖」(以下Hと略称)をあげたい。両図の関連性は今日迄指摘されることがなかったが、おそらくP図とH図の原図は同一であると筆者は推定する。さらに、H図の配色とその凡例を読めば、P図での色づかいの問題もおのずから解決するであろう。

4) H図の書誌

この図は貴重な資料ゆえ、書誌について述べる。H図は現在、大阪歴史博物館所蔵。手描き図。本来一枚ものだが6枚切りにしたものを裏張りして1舗。よって切れ日にはすきまあり。料紙の大きさは縦50×横58.5cm前後。図郭は子持ち枠で、その内側は縦45.8×横53.6cm前後。黒の線描に、緑・黄・朱・青・白色にて採色し、さらに白地も利用する。右下図郭外に〈羽間文庫〉の朱印あり。やや虫損あり。ただしタイトル・凡例・地名等に欧文を保持する。おそらく透写によるか。(これらについては後述する)。6枚折りにした裏面には、中央に次のような直書きの題を有する。〈魯西亜〉の〈西〉字を用いていることに注意。

魯西亜新都ペテルブルグ之圖

その右上隅にラベル2つと、その左下隅には〈羽間文庫〉の朱印あり。H図は帙を有する。青地の紙の題箋を有し、さらに帙の右半面には直に朱と墨の書きつけが存する。朱文は右側、墨文は中央。帙右と隅にラベル、さらに中央部墨による注の下に〈羽間文庫〉の朱印。題箋には次のようにある。

間五郎兵衛旧蔵

魯西亜新都ペテルブルグ之圖 一舗

朱文の書き込みは全6行で次のようにある。

文化の頃間五、兵衛重富桑名侯の委嘱に依り」銅版魯西亜地圖を劃一に摸寫せる事あり」本圖ハ其れに付したる一葉か」因云羽間文庫ハ「魯西亜國地圖譯例 間重富謹識」所藏」外題ハ高橋作左衛門景保の字体に似たり又一考

上文中、第1行の〈桑名〉の2字を鉛筆で消した上で、鉛筆で〈堅田〉と訂正する。次に墨文は以下の2行。

適中々々^(ママ)還海異聞九冊 大概玄沢著」序 言附言二十二枚表裏ニ詳ナリ

以上、帙の題箋および2種の書き込みは後代のものと考えられるが、Hはおそらく幕府要路に残存していたロシア製銅版図の写しであろうという推定には役立つ。

P図とざっと比較する時、地図上の形はほぼ同じとみてよい。さらに採色は、桃色をのぞき、P図

大黒屋光太夫将来図3図の文化史的研究—その伝存、原図、影響と価値について—

の赤、黄、緑、青がそれぞれH図の赤、黄、緑、青にほぼ一致する。P図の桃色はH図では白色に対応するであろうか。コンパスローズ、川の流れを示す矢印もほぼ一致する。

H図中にはラテン文字による記号が付されているが、若干の和文も付される。しかしなによりもラテン文字によるタイトル、同じくフィンランド湾名の標示、さらに凡例中のロシア文字による説明とその脇に付された和文は注目に値する。

5) H図のタイトルと凡例等

タイトルとおぼしきラテン文字による欧文は右上図郭内に5行にわたりこうある。続け書きである。

NOUVEAUPLANORIEN / TEDELAVILLEDELAEOR / ESSETDEEAUXBUPR / CSDE / STPETERBOURC

第3行中央部分〈-TDEE-〉は貼り紙されている。さらに第5行下には縦に2行で次のような和文を有する。

ペテルボル新繪圖 | 子メツコエノ文字

〈子メツコエ〉はロシア語で〈ドイツの〉の意。ここではロシア文字に対してラテン文字を指すと解される。〈ペテルボル〉がフランス語風な読みであることに注意。上の欧文はフランス語で次のように読むことができようか。分かち書きとする。

NOUVEAU PLAN ORIEN- / TE DE LA VILLE, DE LA FOR- / ET ET DE[S] FAUXB[O]JUR- / GS DE / ST. PETER[S]BOURG. [サンクト・ペテルブルグの町, 森および郊外の新案内図] ^{注6}

ラテン文字による標示は図の左下、海の部分にも次のようにある。

PABTIE / DU / COLEEEDEFINLANDE






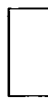

これには第3行下に縦書きで次のように和文が付されている。

他國ノ境ト云フ

この標示は次のようなフランス語として読みうる。

PARTIE / DU / GOLFE DE FINLANDE [フィンランド湾の一部]

さて、右下図郭隅の長方形白地部分には凡例とおぼしき表が存在する。記号が7つ（うち2つを赤で塗る）と、それに対するロシア文字による表示、さらに和文である。ロシア文字の表示が第3の記号には欠けて付されていない。ロシア文字はイタリック体を写したとみられるが、写し手にロシア文字の知識がなかったためか、字形と綴りがきわめて混乱している。今、確実と思われる語頭部分をロシア文字で示し、他は〈…〉で示して、凡例の表を引用すれば次の通りである。記号のうち赤で塗られたものは黒く塗りつぶして示す。

	瓦作寺		IC…	ц…
	板作寺		Д…	ц…
青色總テ樹木ナリ	瓦家			
	板家			
	瓦家		К…	с…
	板家		Д…	с…
	古道		П…	

全体から判断して、上の凡例の表を検討する。十字記号は教会であろう。第1の教会の記号が赤で塗られているのに対し、第2の教会の記号は白ではなく黄色で塗られるべきである。赤は石造を、黄は木造を示すとみられる。教会の記号に続く下3つの矩形のうち、第1は白ぬきであるが、H図では白で塗るべきところか。第2は赤ゆえ、第3は黄色で塗るべきである。第6の記号はこのままでよい。これらの記号の左側中央の記号は白ぬきであるが、H図ではおそらく緑に塗るべきと考える。

次にロシア文だが、第1の赤い教会の記号には〈Каменные церкви [石造りの教会]〉、第2のそれには〈Деревянные церкви [木造の教会]〉が推定できる。これらは写しとられている文字の形から複数形と考えられる。第3の矩形の記号の後には何が書かれていたか不明だが、後述の点から推定すれば、石造建物増築のための用地である由が記されていたであろう。第4の赤の矩形の記号には〈Камениное строение [石造りの建物]〉、第5の白の矩形の記号には〈Деревянное строение [木造の建物]〉、さらに第6の記号には〈Переулок [小路]〉の文字が続くと推定される。第7の矩形には何が続いたかは不明である。なお、以上は何ゆえか単数形で与えられているように、文字からは判断される。

各々には付された和文はこれら推定されるロシア語から、まず第1に〈瓦〉とあるのは〈石〉であり、〈板〉とあるのは〈木〉の意であることが了解される。〈石〉にはレンガも含まれよう^{註7}。よって、第1・2・4・5および6の和文はよしとしてよい。第3の〈板家〉は誤りであり、第7の〈瓦家〉も誤りであろう。さらにその左脇の〈青色總テ樹木ナリ〉の〈青色〉は今日の〈緑色〉を指すであろう。

第3の矩形の記号は、H図では白く塗られるべきであると上述した。これはP図で桃色に塗られるものに相当すると考えられる。P図では主にアドミラル地区に存在するのである。桃色が何を意味するかは、原図との関係上、次節で述べる。

大黒屋光太夫将来図3図の文化史的研究—その伝存、原図、影響と価値について—

図中には上述のコンパスローズや河の流れを示す矢印のほか、ラテン文字のA～FとH, およびI・Kの記号が付されている。これらの記号を説明する表は地図内に見つからず、この点についても原図とのかかわりで、次節にとり上げる。さらにH図中には24箇所ほどに和文が書き込まれているが、その半分ほどがP図に呼応し、他の半分ほどは対応がみとめられない^{註8}。

6) 原図の問題

しかしながら、以上からH図が写したとおぼしき原図の特徴が浮かび上ってくる。図名はフランス語で〈Nouveau plan orienté de la ville, de la forêt et des fauxbourgs de St. Peterbourg.〉だろう。図内もフランス語およびラテン文字を用いるが、色分けの凡例はロシア語による。この図はサンクト・ペテルブルクの平面図であり、森を緑、海・河川等を水色、市街地は石造の建物を赤、木造の建物を黄に色分けする。地名等を記号で示す。この図はフランス語とロシア語が用いられるが、ロシア製であろう。ロシア語とフランス語またはドイツ語、さらにラテン語が同一図内に併用されることは、当時のロシアでは通常のことであった。年紀はフランス語タイトルの下にあったであろう。かくして原図を写したH図は〈ペテルボル新繪圖〉の和訳を与えられ、さらに〈魯西亜新都ペテルブルグ之圖〉と題されて伝えられた。写しの程度はやや粗かったとみるべきである。そして、P図とH図は地形の比較から、精粗はあるものの同図と認められる。恐らく同一原図のともに写図であろう。

上でH図の帙にある書きつけを引用したが、これらの内容は正しいであろう。鉛筆による訂正〈堅田侯〉も正しい。いわゆる「魯西亜本領全圖」にかかわる堅田侯と間との事柄は周知であり、ほぼ『環海異聞』の序列附言に示す通りであろう。ロシア図の多くを間は実見したであろう。だが、ペテルブルク図に関する限り、同上序例附言の次の文こそ、上記書きつけには大いに引用されるべきであった^{註9}。

一 或人魯西亜新都ペトルブルカの図を蔵するものあり。是往年大光将来せるものにや。借つて、以て謄写して奉呈す。図中符号^{フチョウ}あり。かならず其附説ありて其詳を得べきもの也。他日これを得て附呈せんとす。是亦漂客都府の説話と併せ見は、頗る其概を察するに足るべき物なるへし。

玄沢がかく記すこの図は、種々考えあわせれば、恐らく間の所有する図Hであったであろう。

原図につき、亀井高孝は当時のレニングラードまで渉獵を試みたが、同じ図を発見することができなかった。筆者もいくつかのカatalogを検したが、タイトルからは原図と覚しき図は見い出すことができなかった。手許のペテルブルグ図の代表的なものを集めた本に掲げる地図にも合致するものはなかったが、地形から判断して1756年から1799年の間に原図は位置するようである^{註10}。

しかしここにきわめて興味深い図が存在する。最近刊行の『サンクト・ペテルブルクの300年』と題する百科辞典の一に掲載する次の図である^{註11}。タイトルはロシア語・フランス語の二言語併記である。今この図をPφと略称する。

НОВОЙ ПЛАНЪ СТОЛИЧНА- / ГО ГОРОДА И КРЪПОСТИ / САНКТПЕТЕРБУРГА. / [...]
 рид.: X.M. Ротъ 1776 года. [サンクト・ペテルブルクの首府および要塞の新地図。[...] 1776年に
 X.M. ロトの整版。]; NOUVEAU PLAN DE LA / VILLE ET DE LA FOR- / TERESSE DE / St.

PETERSBOURG. [...] par C.M. Roth, 1776. [サンクト・ペテルブルクの町および要塞の新地図。
[...] 1776年, C.M. ロトによる。]

Pφはなによりも図の全体的印象がPときわめて似かよっているのである。掲載写真の説明によると縮尺は1:21000, 1776年 X.M. ロトの製版で、明記されていないがサンクト・ペテルブルクで刊行。彩色は水彩により、大きさは523×801 (456×611) mmとある。さらに関心をひくPφ図の体裁は、中央にペテルブルクの図を大きくとり、左右の欄を設けて図中に記号で示した地名等を細かく表示することである。(ここではすべてロシア語)。その内容は第1に地区名・河川名。第2に場所名。第3に通りの名。第1の記号はラテン文字大文字で示され、計17。第2の記号は数字で示され、計130弱。いずれにせよ、数では圧倒的に少ないが、その表示の方式がPに似る。中央の図郭内には、その右上隅にカルトウーシュが配され、ここに地図のタイトルが示され、また図郭右下隅を長方形に区切り、さらに左右2欄に分けて、左に〈Изъясненіе. [説明]〉、右に〈Explication. [同上]〉と、それぞれロシア語とフランス語による説明を記載する。(Pではカルトウーシュは消失し、下の説明欄は長方形のみの空白であることを想起せよ)。ただし、説明はすべて文字によるものであって、Hのような図と文字で示す形式をとっていない。

再び言うが、PはPφによく似ている。図の左右に欄をもつこと。図郭が子持ち枠であること。カルトウーシュの位置、〈説明〉の位置、形状等々。そして用いられる色が、町の部分において、朱・桃色・黄である。また白地もある。(なお、森と河川・海はおなじく緑で彩色されているが、とくに水を示す部分が本来の色を呈しているのか、写真印刷の拙さによるものなのか一概に判定できない)。

〈説明〉の部分は写真では残念ながら不鮮明で読めないが、次の3点はかろうじて判読できる。即ち朱は石造の建物を示す。桃色は石造の建物の増築にそなえた用地を示す。黄は木造の建物を示す。これで、Pでの桃色の示す意味は判明した。

さらに、Hでのラテン文字大文字はPφに従えば、地区名・河川名を示すことは明らかである。詳述は避けるが、Aは第1アドミラル地区を、Iは大ネヴァ河、Kは小ネヴァ河を指す。(ただし、HでのE・Fは誤って付されている)。

だが、PφとPの図を仔細に見ると、小異も存在し、完全な一致はしない。(例えば橋の数、コンパスローズの位置、道の位置・数等々) これらから、おそらくPはPφよりもやや後の図ではないかと推量される。そこでPの原図だが、刊行は1780年頃と推定する。Pは、Pφと同じく左右両欄をもち、カルトウーシュ中のタイトルは〈NOUVEAU PLAN ORIENTE...〉と変えられ、右下の説明欄も図示による方式に変えられた。彩色はPφを踏襲、ただし海・河川は水色。

7) P1図について

Pと同図の伝来は少なく、管見に入ったものは上掲の静岡県立中央図書館葵文庫所蔵図(P1)1図のみである。(まだ他に伝存するかも知れない)。P1は幕府軍艦奉行木村芥舟の遺物である2つ軸物に仕立てられた貼りませの5図のうちのひとつ^{注12}。第1の軸の箱書は〈享和ノ仙臺漂流民魯國ヨリノ往復道筋」魯西亜國都ノ圖〉、第2のそれは〈露字ニテ地名記入ノ北半球圖 同日本圖」異國船

大黒屋光太夫将来図3図の文化史的研究—その伝存、原図、影響と価値について—

位置記入ノ北海道圖」とある。P1は第1の軸物中、下方に表装されている。Pと同図。大きさは料紙において縦51.4×横72.3cm前後。むれによる汚損がみられるが、それでも色はあざやか。左下に〈亡父木村芥舟之遺物〉の朱印あり。この図の大きな特徴は、PにないA～IおよびK（Jなし）のラテン文字による記号が図中に示されること、しかもHとそれぞれの文字記号がほぼ同一位置にあらわれる点である。（P1はHにつながる。逆にPはP1よりも原図やHから遠のいている。）さらに、左下にスケールが存する（Pにはなし）。また〈六ツワルスコエ街道〉などと説明文が入っていたり、Pでは塗られていない左上隅がきちんと緑色に塗られている。また、なぜか記号を墨で消したあとが多数存する。採色はPに同じ。左右説明欄の文言も同じとみてよい¹³。図郭内右下の矩形の欄は白地のままである。いずれにせよPとP1は小異はあるものの同図である。

以上をまとめてみると次のようになる。將軍への上呈本と目される『北槎聞略』にのみ付された「魯齊亞國都城圖」（P）は、大黒屋光太夫が将来した1780年頃のサント・ペテルブルク平面図を原図として1794年に制作された。原図はフランス語・ロシア語を併用し、色分けによって緑地と水圏、さらに市街部では建造物の種類を示す。地名等は図中に記号を付し、図の左右両欄に具体的に示す方式であった。P図は、原図のこうした基本的性格をひきつぎつつ、主に光太夫が語る〈都府の説話と併せ見〉るために必要な場所等を標示して制作したものであろう。一方、1806年頃間重富が同一の原図からやや粗い写図を制作した。ただし、原図の基本的性格を多く伝える図であった。これが「魯西亜新都ペテルブルグ之圖」（H）である。HはP解読の重要な資料である。また、P図制作と同じ頃、おそらくはP図より前の段階においてP1図も作成され、幕府内にあったものが、木村芥舟の許にわたり、今日迄伝えられた。原図との関係の近さではHがもっとも近く、Pがやや遠く、P1はその中間Pよりに位置するであろう。

「魯齊亞國都城圖」は、附図という性格上、『北槎聞略』の本文の参照図というべきもので、ロシア製ペテルブルク図を利用して作成されたものであった。しかしながら、外国都市図としては、『泰西輿地圖説』（寛政元年・1789）にのせる「フランス之都パリス之圖」「子デルランド之内ヲイトレキト之圖」「エンゲランド之都ロンドン之圖」について、日本人の目にとまったごく初期の図のひとつであった。江戸の切絵図や江戸図とは異なる様式のこのペテルブルク図¹⁴は、別の美的感興を当時の人々に与えたのではなかろうか。

2 「亞細亞墨利加對峙圖」

この図もまた『北槎聞略』附図のひとつである。国立公文書館内閣文庫所蔵図（以下Nとする）に従って、簡単に書誌を述べれば次の通りである¹⁵。

兩架番号185-579『北槎聞略』附図の一。手描き図。疊み物1舗。大きさは料紙において縦53.2×横73.8cm前後。図郭内に〈内閣文庫〉〈日本政府圖書〉、図郭外左下に〈淺草文庫〉（以上すべて朱印）を捺す。

図は墨の線描で、北極を中央上部としユーラシア大陸東部と北アメリカ大陸を対置させた構図をとる。北アメリカをうすい黄色で、シベリアおよびその附近の島嶼を赤で、満州および日本を黄色で緑取りし、他は海も含めてすべて白地のまま。一見してシベリア・中国部分の図が詳しく一とくに河川について一、これに対し、北アメリカは極端に何も書かれていない印象を受ける。中央上には図名(タイトル)を片仮名書きで示す。地名も片仮名書きであり、タイトルともどもロシア文字の音読みを表記したものである(ただし〈川・湖〉の漢字は併用)。日本のみ〈大日本〉と漢字で表記する。本図はよってロシア製図の訳図である。片仮名9行にわたるタイトルは次の通りである。

カルタ]ペレDESTAウリヤエノシチャヤ]イゾブレテニヤ]ヲロシイスキミ。モレプラワテリヤ
ミ]セウエルノイ。チャスチ]ア。(ママ)メリキ]ヲコロレザシチャイミ メスタミ]ラツニヤ。
プテセスツウイヤ。ウチ子ムニヤ]ソチ子ナ。ピリ。イムペラ。アカデミイ。ナウク

このタイトルは、後述するライデン大学のシーボルトコレクション所蔵図や岐阜の飛騨屋旧蔵図に写されたロシア文字タイトル、さらに最終的には船越昭生氏によって示された図によって、次のようなロシア語として読める^{註16}。

Карта / Представляющая / Изобрѣтенія / Россійскими Мореплавателями / на Сѣверной
части / Америки / съ Около лежащими мѣстами / въ разныя Путешествія учиненныя /
Сочинена при Импер. Академіи Наукъ。[北アメリカ北部およびその周辺地域において、さまざま
な旅行時にロシア人航海者らによってなされた諸発見を示す地図。帝室学士院製作。]

事実Nには北アメリカ西岸への航路図あるいは海岸への到達の記事が示されており、原図は元来はタイトルの示す通り北アメリカ西岸発見図ともいべきものである。Nが日本名〈對峙圖〉と題するのは曲解といえるであろう。

Nにつき問題となるのは、本図がどのように受容されたかという点である。この点に言及する前に、このこととかわかる同図の伝来について述べる必要がある。

1) 各地の写図

図の内外を問わず筆者が確認したNと同図と考えられる写図は次の通りである。

- ①国立公文書館内閣文庫所蔵別図
- ②天理図書館所蔵「亞米利加歐羅巴洲圖」
- ③岐阜県歴史資料館所蔵「[ロシア国絵図]」
- ④明治大学図書館所蔵「[亜細亞墨利加對峙圖]」
- ⑤ライデン大学図書館所蔵「北海」

これら5図のうち②はいたみが激しいゆえをもって閲覧できなかった。『樂翁公傳』^{註17}に載せる写真によると写図1枚でタイトルはない。ただしその説明に次のようにある。(双行は()内に変更して引用する)。

包紙に公の筆にて、「寛政四年ヲロシーヤ人蝦夷地に來、所持渡、アメリカ・エウロツハ洲之圖(日本文字は通辭に聞候て書加候由。)」とあり。縦一尺八寸、横二尺六寸。

大黒屋光太夫将来図3図の文化史的研究—その伝存、原図、影響と価値について—

写真によれば彩色があるようだが、実物での確認はできていない。地名等は大変に大雑把であり、むしろ包紙にするす①寛政4年ロシア人将来の図であること、㊦文字は通辞に依拠する^{ie18}ことの2つの情報が貴重である。大きさは換算すれば54.4×78.8cm 前後か。

①はNとは別の『北槎聞略』附図で、桂川国瑞旧蔵にかかる(函架番号186-762)。軸物に仕立てられていて、大きさは計らなかつたが、問題は採色である。写図1枚。Nとは異なり、北アメリカをうすい黄色に、シベリアを赤色に、満州および日本を黄色に塗り、それらすべてを朱で縁どる。内容はNと同じ。

③は上述した飛騨屋旧蔵図で、『飛騨屋古圖類綴』に含まれる写図である。大きさ47×61.7cm 前後。写図1枚。中央上にカルトウーシュを有し、ロシア文字による4行のタイトルをもつ。ただし不正確な写しで、上掲の第1・3・4・6行のみの示す。河を水色で塗り、海は水色で縁どる。満州を黄色で、大日本を赤で塗る。他は白地のまま。地名も大雑把だがロシア文字表記を写す。シベリア地方に小さな三角形(内を赤で塗る)が点々と存し、これらには片仮名による原住民名(?)を付す。この記号についてはさらに要調査。右上隅に〈武川藏書〉の朱印あり。

④は大きさ54×79cm 前後。写図1枚。蘆田伊人旧蔵。タイトルを欠く。最大の特徴は北極を下にし、左右に記号の説明欄を有する。記号は図中に片仮名・漢数字で示される。これらは地名あるいは原住民名を示す^{ie19}。図は北アメリカを緑色に、シベリアを赤に、満州を黄色に、日本を白ぬきに色分けする。(この色分けの大部分は⑤に似る)。左下に〈蘆田文庫〉、右下に〈蘆田伊人圖書記〉〈子高〉の朱印を有する^{ie20}。

⑤はシーボルトが持ち帰った最上徳内筆図^{ie21}。セルリエ番号186。大きさは54.5×72cm 前後。写図1舗。本3冊に附された図である。図の表紙中央の題箋に〈北海〉と書きその下にロシア文字で〈KAPTA〉とある。左下に〈最上氏〉の墨書。図郭外右下に〈白虹齋藏〉とあり朱印を捺す。図中央上にロシア語タイトルを時に不定確ながらすべて写す。図中ロシア文字の下に片仮名で読みを示す、あるいはシベリア・満州では片仮名のみで地名を示す。図は北極が上。北アメリカを緑、シベリアを赤、満州・日本を黄色に淡彩する。この図には張り出し(27×19cm 前後)がありカムチャツカが描れているが、そこには片仮名による川の名が多数しるされる。

2) Nの原図

Nの原図についてはすでに船越昭生氏によって確定された。上掲のタイトルを有するロシア製図で、1774年刊行と推定されるという。サンクト・ペテルブルク刊^{ie22}。筆者はさらに配色の問題を考えたい。原図は銅版に手彩色の図であったと思われる。配色は上掲⑤の図すなわち最上徳内写図「北海」と同じ、シベリアを赤、満州・日本を黄、北アメリカを緑で、それぞれ淡く塗るか、あるいはそれぞれ縁どりしてあったと推定する。

N図は原図のタイトルが示すように、元来はロシア人による北アメリカ大陸西岸の発見を示す図であった。ところが、『北槎聞略』の附図として採用されることにより、まず第1に図内の形からアジア・アメリカ両大陸の対峙図と名づけられ、第2に光太夫の漂流から滞在さらに帰国時の行程を示

す参考図とされ、第3に当時の北方の地理的知識を示す図として日本側に受容されたといえよう。さらに幕府内から民間に流出すると、蝦夷地の場所請商人であった飛驒屋にとっては北方の形勢に対する重要な情報のひとつとして、または学者にとって北方の異国の地理的知識のひとつとして、それぞれ役立つのではなかろうか。ロシア製の東アジアを含む図は次節で述べるごとく、北極方向を下にするから、今日我々が見慣れている図とは上・下逆の図となる。このようなこともあって、タイトルを消されたN図は、④のように上・下を逆にして描かれた可能性もある。また、シベリアの地理のみならず、『北槎聞略』中の原住民の項や、往時流布していた各国民の図を添えた万国図などの影響下に、原住民への関心をも含んだ図に変ぜしめたのかも知れない。いずれにせよ、原図からかなり離れたものになってしまったと考えることがきよう。

3 「魯齊亜圖」

ここでいう「魯齊亜圖」は天理図書館所蔵松平定信旧蔵図をいう（以下Rと略称）。包紙に〈赤人所持魯齊亜圖〉とある。〈守國公御筆〉とある。この図は光太夫関連の絵・図群に含まれるものであり、上記の題名からラクスマン・光太夫将来図とふつう考えられている図である。しかしながら、図の内容を検討してゆくと、はたしてこの図がかかる将来図であるかどうかという疑問に逢着する。「魯齊亜圖」に関し、成立と原図が第1に問題となる事柄である。この検討に入る前に、その書誌を略述する。

1) R図の書誌

函架番号081-イ53-8-11-4。写図1舗。大きさは料紙において縦二尺八寸横二尺九寸（≒85cm×87.9cm）。薄様の和紙に、縁から左・右で5cmほど、上・下で10cmほど内側に朱線枠をひき、その内に今日のシベリア・ロシア・満洲・中国・朝鮮・日本・インドを描く。図は墨引きで、各地域に淡彩を施す。この色分けは重要である。すなわちシベリアとロシアをうすい桃色に、満洲を黄土色に、蝦夷・唐太を黄色に、日本をぶどう色に、朝鮮をあずき色に、中国を桃色に、天竺を茶色にそれぞれ塗る。満洲には地名はなく、蝦夷以下はそれ自身の地名のみを記するだけだが、シベリアからロシアには大小の朱で町を示し、かつ里程を表示する。アムール河北岸、天竺北方の山並みは山頂を北に向けて描かれ、黄色に採色される。ただし、図はどうかや北を下、南を上とする方向で認められた様子である。（ただし、文字の書かれた方向の漠然たる印象である。日本では四方から読むような方向を定めぬ書き方が普通であり、そのような要素も認められる、完全に普通とは上・下逆とは言いきれぬ）。そうであれば、原図との関係性—ロシア製図はこの場合、北を下、南を上とする—を示唆する。海や河川・湖沼は白ぬき。ロシア・シベリアにおける地名や注の書き込みは80許りであるが、詳細は割愛する^{注23}。里程が書かれているため、これを光太夫のロシアでの行程図と見る向きもあるが、正しくない。他図で朱で示される路程・航路はこの図ではうす茶の線で示されている。この図では朝鮮半島が島として描れている。

大黒屋光太夫将来図3図の文化史的研究—その伝存、原因、影響と価値について—

2) R図の類図

明治大学図書館蘆田文庫には長久保赤水述「魯齊亜之圖」が最近収蔵された(R 4と略称)^{注24)}。この図はRの類図とみられる。Rの類図は、このほかに市立函館図書館、横浜市立大学図書館、大阪の愛日文庫に存する。それぞれ「魯齊亜國全圖」(R 1)「魯齊亜圖」(R 2)「魯齊亜國全圖」(R 3)^{注25)}と題する。Rをふくむ以上の5図はインドの西に地続きの大陸を描くか、海とするかによって、さらに2分される。上の4図についてはすでに書誌を明らかにしているから、今特徴点のみにつき、Rもふくめて表に示せば次の通りである。西天竺を有するものはR 1とR 4、他はこの場所も海で、四周すべて海のタイプとしてR・R 2・R 4と2種に分類できる。しかしながら、「北槎聞略」の附図等からみて、これらすべてはとても近代図とは思えず、ラクスマン・光太夫将来図に直結するとも思えない。

表1 各図の特徴

略号	標題	年紀	大きさ	図の上方の方角	地形等の特徴点					
					蝦夷2島の形*	朝鮮半島の形	インドの名称	インドの西側	東南海**	西北海
R	魯齊亜圖	-	85×87.9cm	南?	日本型	島	天竺	(海)	-	-
R 1	魯齊亜國全圖	-	79.5×84cm	北	日本型	半島	天竺	西天竺	-	-
R 2	魯齊亜國	-	68×80cm	北	日本型	半島	天竺	(海)	-	-
R 3	魯齊亜國全圖	文化年製 (1804-1817)	77.5×83.5cm	北	日本型	半島	天竺	西天竺	-	-
R 4	魯齊亜之圖	-	66.4×75.6cm	北	日本型	半島	天竺	(海)	-	-
M 1	莫斯科亜魯齊亜地理圖	文化4年写 (1807)	69×79cm	南	ロシア型	半島	印度	(地続き)	+	+
M 2	莫斯科亜魯齊亜地理圖	-	72×80cm	南	ロシア型	半島	印度	(地続き)	+	+
M 3	魯西亞國地圖	-	26.1×34.5cm	北	ロシア型	半島	天竺	(地続き)	-	-

* 「魯齊亜國疆界全圖」・同「分圖」第一のごとくやや長めの型をロシア型、「蝦夷輿地之全圖」のごとくひしゃげた型を日本型と仮称。

** +は有、-は無を示す。

表2 各図の色分け一覧

略号	シベリア ・ロシア	蝦夷2島	日本	満洲	女直	朝鮮	韃旦	(中国)	(インド)	(インド の西)	海・河 川・湖 等	山脈	路程 航路
R	薄桃色	黄*	ぶどう 色	黄土色		あずき 色	-	桃色	茶色	-	白地	黄	薄茶
R 1	薄朱	黄	緑	桃色		白地	-	白地	灰色	白地	青	緑	朱
R 2	白地	黄*	白地に 朱の縁 どり	黄土色		-	緑	桃色	-	青	緑と黄	朱	
R 3	薄朱	黄	緑	桃色	白地	-	白地	灰色で 縁どり	灰色で 縁どり	青	緑	朱	
R 4	薄朱	桃色	朱	桃色		-	白地	白地	-	青	白地	朱	
M 1	白地	桃色*	朱	桃色	白地	白地	黄	白地	白地	青	緑	朱	
M 2	白地	赤*	黄	白地	赤	白地	白地	白地	白地	青	緑	朱	
M 3	白地											朱	

*松前領部分はそれぞれ日本と同色に塗る。

3) 他の類図

さてここにRに関連するとみられる別の一連の類図が存在する。すなわち、横浜市立大学所蔵「莫斯科亞魯^(ママ)齊^(ママ)亜地理圖」(M 1とする)、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵「莫斯科亞魯齊亜地理圖」(M 2)、北海道立文書館所蔵『北狄事畧』所収「魯西亜國地圖」(M 3)である。これら3図は図形からみて、R・R 1～R 4よりも比較的近代図的である。M 1～M 3の一群の図はどのような関係性を有するであろうか。その前に、M 2につき書誌を略述する必要がある。(M 1・M 3はすでに他で記述した)。

4) M2図の書誌

M 2は函架番号2085 (又は図類662)。手描き図。彩色。畳み物一舗。保護表紙つき。大きさ縦70.5×横79.5cm。なによりも南が図の上方、北が下方となっている。(M 1に同じ)。内題は2行にわたり次の通りである。

伊勢白子船頭光太夫水主磯吉持帰」莫斯科亞魯齊亜地理圖

図の形と内容はきわめてよくM 1に似る。ただし、彩色はより単純で、蝦夷2島^{註26}と千島2島を赤、日本を黄、朝鮮・中国・琉球をまた赤に塗る。他は白地のまま。海・河川・湖は青。山は山頂を南方に向けて連って描かれ、緑。特徴的なのはゴビ砂漠を灰色帯状(23×3cm)に黒点を付し中央部を黒く塗りつぶして表わす。日本は蝦夷の松前から本国を黄色で塗るが、国境もひかれている。

上掲の内題は次のようなM 1の内題とその脇に付された一文に対応する。

大黒屋光太夫将来図3図の文化史的研究—その伝存、原図、影響と価値について—

莫斯科亜魯齋地理圖

伊勢白子船頭光太夫水主磯吉持歸之」(以下略)

M2も路程・航路は朱線で示され、町は朱丸で表わされ各地の注を有する。それらは詳細に比較したが、いちいちM1図に呼応する。しかし、概してM2の方がM1よりも古い感じがするのである。

5) 3図の特徴点

M1・M2・M3の特徴点を比較してみると、大まかにいって①図形は3図共通する、②M3は縮小図であり、彩色もされていない。③M1・M2が南を上とするのに対し、M3は北を上とする。ただし、山脈はM1・M2・M3すべて山頂を南に向けて描かれる。M1・M2がきわめてよく似ており、原図を彷彿とさせるのではないか。

Rのグループと対照させるために、上掲の2表にこれら3図を加えてみると、いっそう特徴点が明確化するであろう。明らかにRのグループとM1以下のグループは類を異にする。前者は模式化された図のようであり、後者はより当時の地図を反映させる図のように日には映じるのである。おそらく前者は後者の日本的な変容による図ではなかろうか。すると、後者の原図はいかなるものであったろうか。

6) 原図の問題

M2につき『北海道関係地図・図類目録』(北海道大学附属図書館, 1981)は次のように注する。

前掲図と同種図であるが、これは日本の資料により樺太、北海海のほか日本、朝鮮等を付加す。千島列島は簡略。蝦夷地は外国の如く日本地と色分けす。

上の〈前掲図〉は、同目録の次の図をいう。項目全体を引用する。

2084 [魯西亞国図] (仮題) 手書 無彩 81×93 [註] 寛政4年(1792)ラクスマン使節根室到来の際、接待にあたった場所請負人村山伝衛配下の者がロシア人所有の地図を模写したものか。片仮名による地方の表記に誤写なし。ベテルブルクから千島列島、アリューシャン列島へ至る道筋を朱点で示す。村山家の印あり。図類1319

この「[魯西亞国図]」をMとすれば、Mにつき上記目録の編者である秋月俊幸氏は、別稿において次のように説く^{註27}。Mはいわば往時のロシア帝国地図—しかも古いタイプの一—であるが、普通の地形図ではなくシベリア地方を中心とする実用地図である。Mはシベリア地方を中心とする実用地図であり、そこではシベリアの交通とともに、当時の主産業であった毛皮獣猟の航路に重点がおかれ、地名の順序や距離数が正確に表示されている。そして上記目録の注同様、Mはラクスマン一行が根室で越冬中、場所請負人村山伝兵衛もしくは配下の者がロシア人所有の地図を借用の上写しとり、地名や注については日本語通詞トゥゴルコフの助けを得て記入したものであろうと推定される。さらにRについてもふれ、形状からみてRはMと同種類の地図であるとし、前者Rが後の日本人の手で修正と追加がなされた図であるとしている。

筆者は迂闊にも上記目録の注を読まずに、秋月氏の別稿論文により次のような仮説を述べた^{註28}。

すなわち結論の主要部分のみ述べれば、ラクスマン来航時、ロシア製実用地図から一つの訳図にして模式図が作成され、これに東アジア部分を描き加える半世界図が2種作られた。今回、筆者はこの仮説を次のように修正したい。上記の各図を関連づけながら記す。

ラクスマン来航時、種々の地図のうちにM1・M2・M3の図の形状で描かれたロシア製シベリア・東アジア図—銅版図か—と、手書きのロシア製シベリア実用地図が存在した。これら2図は南を上、北を下とした図であったであろう。前者をP、後者をMφとすれば、PとMφはラクスマン・光太夫将来図であり、PはM1・M2・M3の原図であり、MφはMの原図である。ただしM1・M2・M3はPの形状と彩色を踏襲したまま、シベリア部分にMφの訳図をはめ込んだ図と考えられる。R・R1・R2・R3はPおよびM1・M2・M3をもととして、東アジア部分を当時の日本側の知識でいわばさし換え、模式化した図ではないか。さらにR3はR・R1・R2・R3のグループをさらなる元として、赤水が天明の蝦夷地探検の情報を書き加えた図である。ラクスマン根室来航時あるいはこの時からさほど時を経ずして、2種の図すなわちM2およびRのごとき図が作成された。原図のPおよびMの2図に従い、M1・M2およびRは南を上、北を下とする図としてとどまった。

『魯齊亜圖』を含むこれら一群の図は、シベリア・ロシアの路程が大黒屋光太夫のロシア遍歴の行程と一部分一致はするが、これを主として表わすとするのは、誤りである。これらはあく迄日本の北辺を描くいわゆる北方図であり、さらなる日本化された模式図であった。ついで地理学者赤水は、従来未知であった北方の具体的地名と距離、さらに乏しいとはいえ具体的地誌を奇貨とし、天明の蝦夷地探検による新情報を加筆し一図を作成した。これを原目図にくり込んで、自己の世界図作成に役立てることになる。

まとめとして

「魯齊亜圖」はロシア製シベリア・東アジア図および手描きのロシア製シベリア実用地図に遡り、なによりも日本北辺を知る図として用いられた。ここでは大黒屋光太夫のロシア遍歴を説明する図としても用いられた。この図と同様の合成図は、元の資料は異なるものの、本多利明作と目される蘆田文庫所蔵「[[日本並北方図]]」がある。又シベリア・ロシア路程の朱線や注は、市立函館図書館所蔵の写図「魯西亞滿州山韃唐太之圖」^{注29}や文化6年刊・古屋野意春製「萬國一覽圖」中にとり込まれることになる。後者は〈買人に與へず商客に弘めず唯社中塾童に授け示すのみ〉とし、教育に利用された。

「亞細亞墨利加對峙圖」は元来ロシア航海家による北米西岸の発見を示すロシア製図であったが、「北槎聞略」附図として利用されることにより、日本北辺図および北極を中心とするアジア・アメリカ両大陸の対峙図として受けとめられた。

「魯齊亞國都城圖」は元来サンクト・ペテルブルクの平面図であり、種々の場所・施設・通り等を図中に記号を付し、説明欄を設けて示す方式の図であった。この図も『北槎聞略』附図として採用され、原図の体裁を利用して光太夫のペテルブルク滞在経験を説明する図であった。この図の写図は少

大黒屋光太夫将来図3図の文化史的研究—その伝存、原図、影響と価値について—

ない。しかし我が国に伝来した西洋都市図の初期のものであり、我が国通用の都市図とは異った美的感興を与えたであろう。

以上3図は、学術上我が国の地図作成あるいは地図研究に深く影響を与えたと容易にいうことができるが、一方では元来の性格を変容させつつ我が国の文化における西欧理解の一端をになったということができる。

【謝辞】 本稿を草するにあたり以下の諸機関所蔵の貴重書を閲覧しました。(順不同)。

国立公文書館内閣文庫 静岡県立中央図書館葵文庫 大阪歴史博物館 天理図書館 岐阜県歴史資料館 横浜市立大学図書館鮎沢文庫 市立函館図書館 北海道大学附属図書館北方資料室 北海道立文書館 大阪市立開平小学校愛日文庫

又、英文につき Prof. M. Petersen にみていただきました。併せて記して謝意を表します。

注

1. 本稿のタイトル中〈大黒屋光太夫将来〉の謂いは、『北槎聞略』凡例にいう〈…漂人等が齎し來たる…〉云々を、光太夫を代表として表現したものである。各地図がだれの所有であったか、ロシア側の贈答品であったかの細部は分からず、よって以下〈光太夫・ラクスマン将来〉と並記することもある。
2. 亀井高孝『光太夫の悲恋』(吉川弘文館, 昭42), p.210～.
3. 以下の記述は一度発表した以下の小文に従う: 岩井憲幸〈「魯齊亜國都城圖」について〉, 明治大学図書館紀要「図書の譜」9, 2005年3月。
4. 弟=第(やしき)の意。
5. []内はP1に〈カメン〉とある。
6. 語源俗解の綴り〈FAUXBOURG〉の現代語綴りは〈faubourg〉。なお語末は〈-burg〉であったかも知れない。
7. 参考文献B1によれば, 1787年の家屋調査では3431戸のうち1291がレンガ造り, 残りは木造という。1762年はレンガ造りが460, 木造が4049だとし, レンガ造りの増加をのべている。
8. 表を割愛。〈「魯齊亜國都城圖」について〉p.51を見よ。
9. 以下の引用は参考文献A3による。
10. 参考文献B3による。
11. Три века Санкт-Петербурга ; Энциклопедия в трех томах, т.1, Осьмнадцатое столетие, кн.2, Academia, 2003.
12. 第1の軸は以下の2図。〈享和ノ…〉図は『環海異聞』中の世界図である。第2の軸は, その箱書きに〈露字ニテ地名記入ノ北半球圖 同日本圖 異國船位置記入ノ北海道圖〉とあるように3図を貼る。第1・2は光太夫・ラクスマン将来図である。第2は『北槎聞略』附図の一「皇朝輿地全図」であり, 珍しい。しかも古いロシア語説明文に大意の和訳が添えられていて, 貴重である。第3図は近代的北海道図だが, 同定は未了。
13. 段落が多少異なったり, 用字が異なったりするが同じとみてよい。時にPの欠字・脱字を補う。
14. 他のペテルブルク図として『釣遠探隠録』に付された「魯西亜都府圖」がある。1703年の図。
15. 参照: 岩井憲幸〈蘆田文庫未整理地図類中のロシアにかかわる三図について〉, 「図書の譜」3, 1999年1月。
16. 参考文献A5の図9b.
17. 澁澤栄一著, 昭和12年, 岩波書店。第十一章中。

18. 通詞とは日本側通詞か、ロシア側通詞か、はたまた光太夫も含むのかは問題だが、おそらくこれらすべてをさすのであろう。
19. 一覧表割愛。注15の小文 p.87～を見よ。
20. 尾張明倫館教授・細野要斎の印か。
21. ライデン大学図書館蔵。以下筆者のノートによる。
22. 参考文献A5参照。
23. 次注24に掲げる2小文中各々 p.225～の表3, p.125～の表を見よ。
24. 参照：岩井憲幸〈新収の長久保赤水述「魯齊亜之圖」について—比較研究によせて—〉, 蘆田文庫編纂委員会中間報告(3), 「明治大学人文科学研究所紀要」51, 2002年；岩井憲幸〈長久保赤水述「魯齊亜之圖」成立に関する一考察への補筆〉, 同上中間報告(補遺), 同上53, 2003年。
25. 包紙には〈魯西亞國全圖〉と〈西〉字を用いるが、今内題による。なお、この図については次を見よ：岩井憲幸〈愛日文庫所蔵「魯齊亜國全圖」略述—長久保赤水述「魯齊亜之圖」との関わりにおいて—〉, 「図書の譜」7, 2003年3月。
26. ただし松前の部分は黄色に塗る。
27. 秋月俊幸〈蝦夷地に伝わったロシア地図〉, 「えうみ2」, 1975年秋。
28. 注24に掲げる小文。
29. 題箋貼込みに〈此圖高橋重賢朝臣所藏文政年間模寫焉葦原道磨〉とある。「葦」は蘆。

参 考 文 献

*注で述べたものは再掲しない。

A. 和文

1. 亀井高孝『北槎聞略』, 三秀舎, 昭14年再版。
2. 杉本つとむ『北槎聞略—影印・解題・索引—』, 早稲田大学出版部, 1993年。
3. 杉本つとむ他『環海異聞—本文と研究—』, 八坂書房, 1986年。
4. 亀井高孝『大黒屋光太夫』, 吉川弘文館, 昭45年。
5. 船越昭生『鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的研究』, 法政大学出版局, 1986年。
6. 秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』, 北海道大学図書刊行会, 1999年。
7. 開國百年記念文化事業會編『開國百年記念明治文化論集』, 乾元社, 昭27年。
8. 同上『鎖国時代日本人の海外知識—世界地理・西洋史に関する文献解題』, 乾元社, 昭28年。
9. 『鮎澤信太郎文庫目録』, 横浜市立大学図書館, 1990年。
10. 『日本北辺関係旧記目録(北海道・樺太・千島・ロシア)』, 北海道大学附属図書館, 1990年。
11. 『蘆田文庫目録 古地図編』, 明治大学人文科学研究所, 2004年。
12. 「しずおか」の貴重書』, 静岡県立中央図書館, 2005年9月。

B. 欧文

1. The Picture of Petersburg. From the German of Henry Storch, London, 1801
2. K. Baedeker, Russia with Teheran, Port Arthur, and Peking, Leipzig, 1914.
3. Санкт-Петербург на рубеже всков; Историко-картографический атлас, Институт Проблем Управления, М., 2003.
4. Федеральная архивная служба России-Российский государственный архив военно-морского флота, Аксоно-метрический план Санкт-Петербурга 1765-1773 гг., СПб., 2003.

(いらい・のりゆき 文学部教授)